
家庭教師ヒットマンREBORN! 憤怒の雪、来る！

ちゃんぽん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

家庭教師ヒットマンREBORN！ 憤怒の雪、来る！

【Nコード】

N2163Y

【作者名】

ちゃんぼん

【あらすじ】

主人公・ゼロナは復讐を目的に生きてきた。対象は、兄。イタリ
アで育ち、フリーのヒットマンとして兄の情報を得、いよいよ復讐
の計画を立てた。

必ず、殺してやる

プロローグ

私は、イタリアの下町で生まれた。

“彼”の妹として。

私は“彼”が兄として大好きだったし、“彼”も私に優しくしてくれた。

だけど、ある日“彼”はいなくなった。

私は、私の母に捨てられた。

私がいると“彼”の障害になる、って。

…ああ、世界は単純だなあ。

結局は皆、己の利益の為に行動する。

その為なら、自分の子供でも捨てるのか。

紙くずのように、捨てるのか。

あはは…。

なんだか可笑しくなってきた……。…。

「……ああ、世界は単純だなあ」

誰にも聞こえないような小さな声で、呟いてみる。

その声は消える。

夢く、消える。

まるで人の命のように。

どうして私は“彼”…兄と一緒に行けなかったのかな？

私が普通で、普通だから？

いいえ…私は、普通じゃない。

兄も母も…誰も知らない秘密がある。

…いつか、私を捨てたことを後悔させてあげる。

そして、母と共に私を置いていった…兄も。

『復讐対象：兄・母』

ポロ…。

目から水が垂れる。

これは涙では無い。

絶対に違う。

私は心を氷の中に閉じ込めた。

もう、二度と溶けぬ氷の中に。

じゃあ、これは何？

指で触って、見てみる。

その液体は、赤い。

「血……？」

…そうか、祝ってくれるのか…」

復讐劇の、始まりを。

私は捨てられ、一人で生きてきた。

母が死んだとか聞いた。

復讐する前に、死ぬんじゃないよ。

仕方ない、この分は兄に…。

ボロッ。

また、目から血が。

不思議だなあ。

心を氷漬けにしたのは随分昔なのに、
今心が痛い気がする。

悲しんでる訳では無い。

でも孤独を重ねすぎた。

ああ、ちょうどいい。

今から孤独で生きていこう。

スッ。

目から出てくる血が止まる。

もう、兄のことは忘れよう。

うん、それがいい…。

それが……。

…今度は、目から透明な液体。

これが、涙………？

いや、違う。

涙だとしても、感情は無い。

それは涙ではなく、ただの水だ。

そう…。

さあ、祝福しようじゃないか。

新しい劇の始まりを。

プロローグ（後書き）

意味分かんないですね…。

次の話で主人公設定を書きますので！

兄が誰かはまだ秘密です。

それでは

零幕 主人公設定

ゼロナ

背は高め。

肩までの黒髪。目は細く、紅。

イタリアの下町で育つ。

母と10歳違いの兄が1人。父は生まれる前に還らぬ人に。
兄とはボンゴレ独立暗殺部隊V A R I Aボス、X A N X U S。

2歳のある日母に捨てられ、母と兄に復讐するために生きる。
母が死んでからは、兄だけに。

捨てられた当時、X A N X U Sの年齢は12歳。

どこのファミリーにも入らず、フリーの殺し屋として依頼を受ける。

一国に留まることは無く、依頼が終わるとすぐに他国に向かっていった。

兄に復讐するために、10歳で日本に向かう。

ボンゴレのことを心底嫌っていて、ツナの友達になる。

頭が良く、運動神経バツグン。顔もとても整っていて、『かわいい』より『美人』。

信頼した者には優しいが、敵には冷酷で残忍。

誰も知らないある力を持っている。

零幕 主人公設定（後書き）

気づいた方もいるかもしれませんが、主人公の名前を変えました・・。

そして、兄も明らかにしました。

XANXUSです

・・・あの人に復讐するだなんて・・・ね。

ちなみにXANXUSが9代目にひきとられたのを12歳、その時ゼロナは2歳。

ツナと同じ年です。

情報が追加され次第、ここに追加していくので！
ではまた

巻幕 日本へ

「や、やめ・・・やめてくれ

！！！」

「黙れ」

ズガンッ！

今日も、依頼を受けて仕事・・・人殺しをしている。

ゼロナは最後の1人を依頼したマフィアから渡された銃で殺し、近くのソファアーに座る。

傷一つ無く、服に返り血すら付いて無い。

「今回の報酬は・・・アイツの情報があるといいんだけどなあ」

アイツ・・・それはゼロナが2歳の頃に捨てられた以降会っていない兄、XANXUSのことだ。

ゼロナは、XANXUSに復讐するために生きている。

母も復讐対象だったのだが、死んでしまった。

今、ゼロナは10歳。

捨てられて8年が経った。

「あ、報告しないと・・・」

ポケットから携帯を取り出し、電話をする。

「あ、もしもし？」

『終わったのか？』

「終わった」

『噂通り仕事が速いな。して、報酬は？』

「ある人の情報を貰えるかな？」

『我々のファミリーは情報が少ないが・・・。誰だ？』

「どっかのファミリーにいる、XANXUSって男。今は20歳かな？」

『XANXUSか……。4年ほど前から聞かないが、知っているぞ』

「んじゃどこのファミリーか教えて。報酬は情報と、この銃もあればいいよ」

『それだけでいいのか？』

「いいから。早くして」

『……。XANXUSは巨大マフィア、ボンゴレにいる。9代目の実子という話だが、8年前に聞いたのが初めてだな』

「は？実子……。？」

『どうかしたか？』

「・・・いや、何でもない。他に情報はある？」

『他にか・・・。ああ、探し人をしている、とも聞いたことがある』

「人？」

『誰かは知らないがな・・・。これ以上は情報が無い。悪いな』

「いや、私にとっては大きな情報だよ。それに銃も貰えるならラッキーだしね」

『・・・XANXUSの情報を、なぜ欲した？』

「・・・私の望みだから、かな。これ以上話す気は無いよ」

『こちらもそのつもりは無い。以上で依頼は終わりだ。いいか？』

「うん。それじゃあ、またね」

。ッピ。

「ん、ボンゴレか……。それにしても実子？そんな嘘ついてどすんだか」

アハハ、と笑う。

ソファーから立ち上がり、歩き出す。

だがあることを思い出し、足を止める。

「……ボンゴレ……。？あそこには、噂があるんだよね。んー、何だっけ？」

少しの荷物が入ったカバンの中から手帳を取り出す。

パラパラ、とページをめくり、あるページで止める。

「ん、ボンゴレ発見 えーっと……。あ、コレだ。『ボスは初代ボンゴレボスの血縁関係に当たる者しかねない』」

ちなみに、名前はゼロナが勝手に決めたものだ。

「ん？ってことはザン兄^{にい}はボスになれないじゃん。……。だから9代目の息子って嘘ついたのかな……。？」

ゼロナはXANXUSのことをザン兄^{にい}と呼んでいる。

ずっとそう呼んでいたからだ。

再会した時も、そう呼ぶつもりだが・・・。

「んじゃ、もし他にボス候補がいたらソイツの仲間・・・いや、友達にでもなって、後押ししようかな ザン兄^{にい}にとって一番嫌なことだろうしね」

ピリリリ・・・。

電話がかかってきた。

ゼロナは殺し屋として有名なので、しょっちゅう依頼の電話がくる。

ボンゴレからはきたことはないが・・・。

「もしもし」

『貴女がゼロナさんですか?』

「お、今回の奴は礼儀正しいな。そう、私はゼロナで合ってるよ」

『殺しの依頼をしたいのですが』

「ファミリーの名前は?」

『我々はまだ名前を作ってなくてね』

「ふーん・・・まあいいけどね。先に報酬を確認したいんだけど」

『望む額は?』

「金じゃない。金なら腐るほどあるからね。私が欲しいのは情報さ」

『情報・・・ですか』

「そう、情報」

『それならラッキーでしたよ。我々は情報も武器としていくつもりなのでね』

「ならいい。ボンゴレファミリーのことで少し調べといてくれればね」

『！！ボンゴレ……。いいでしょう』

「なら依頼を受ける。標的は？」

『今、北イタリアにいる一人の殺し屋・ドータです。奴は我々の裏切り者。情けはいらない』

「情けなんてかけたこと無いよ。ドータ、ね。了解した」

『ボンゴレで特に知りたいことは？』

「お、そこまで詳しく調べてくれるか。私が知りたいものは・・・

次期ボンゴレ10代目ボス候補だよ」

『ほう。次期ボスを潰す・・・と?』

「潰すわけではないよ。そしてこれ以上話す気も無い」

『結構ですよ……。では、頼みました』

ピッ、と電話が切れる。

「さて・・・と。北イタリアか……。ここはフランスだし、すぐに着くね」

ゼロナは死体を踏み潰しながら部屋を出て行った。

それから、10日後。

ゼロナは空港にいた。

その理由は、ゼロナが依頼の報酬の情報を聞いた時のこと。

「さて、依頼は終わったよ。情報をくれるかな？あ、次期ボス候補の中で一番弱い奴のだけでいいや」

『一番弱い……。となると日本人か』

「お、いいじゃないか、日本 行ってみたかったんだよね」

『名は、沢田綱吉。虫一匹も殺せないような弱く、臆病者』

「虫一匹も!？」

『ああ、そうらしい。そして今の年齢が……。貴女と同じ、10歳ですね』

「私と同じ……。か。どこに住んでいるかとかは分かる？」

『さあな……。何せ巨大マフィアだ。次期ボスのことなど外に漏らさないだろう』

「んー、仕方無いね。自力で探すか。ありがとね、まだ名も無きマフィアさん」

『いや、こちらこそ礼を言う。情報などで裏切り者を始末できたのだからな』

そして、ゼロナが乗る飛行機は日本行き。

ボンゴレ10代目ボス候補最弱の沢田綱吉に会いに行くのだ。

「さて、虫も殺せぬ沢田綱吉さん 会えることを祈ってますよ」

ゼロナは日本へ発った。

まだ見ぬ沢田綱吉に会うため・・・。

兄に復讐するため・・・。

式幕 沢田綱吉に会う

日本に着いて、2年が過ぎた。

沢田綱吉、という人物はまだ見つからない。

「次はここだね……。並盛町」

並盛町は日本の中でも平凡な町だ。

都会のように高いビルが立ち並んでいるわけでも無く、田舎のように木が生い茂りすぎてもいない。

「こーゆーところにいそつだね、沢田綱吉」

今は3月の終わり。

そしてゼロナは12歳。

つまり、中学生になる。

「んー、沢田綱吉がいなければ私はこの街を離れたいんだけどなー。沢田綱吉は私と同年だから……。うん、中学校行こう！」

そこら辺にいた大人に近くにある中学校を聞くと『並盛中学校が一番近い』と教えてくれた。

なぜか少し、怯えながら。

すぐに向かったが、ごく普通の中学校だった。

門の近くでは、制服を着て泣いている人がたくさんいた。

そして門には『卒業式』の文字。

「あー……。今日って卒業式なのか……。ってことはまだ沢田綱吉はいないな」

今度は並盛小学校に行く。

場所は、泣いてない中学生に聞いた。

すると、ここでも『卒業式』の文字。

ここは静かだが、体育館の方から人の気配がする。

「・・・もし沢田綱吉がこの町にいたら、今卒業式の真っ只中かな？」

校内に入り、体育館に向かった。

ガラ・・・。

ゆっくりと扉を開ける。

中には大量の人。

「（何この人数．．．。今すぐ殺して沢田綱吉がいるかどうか確かめたい．．．）」

懐にある銃に手を伸ばした時。

『沢田、綱吉！！』

「はい．．．」

卒業書証を貰うために呼ばれた者の名前が、ゼロナが探している者の名前と一致した。

「あれが・・・沢田綱吉・・・？」

ゼロナは信じられないような表情でその者を見る。

何のオーラも、威圧感も無い。

虫一匹殺せない、というのは真実だったようだ。

ふいに、『沢田綱吉』と目が合った。

いや、もしかしたらゼロナの勘違いかもしれない。

だが、ゼロナは目が合ったような気がした。

「・・・きっと、コイツは当たりだ・・・」

ゼロナは嬉しそうに笑う。

まるで獲物を見つけたように・・・。

卒業式が終わり、生徒が校舎から出てきた。

中には泣いてる者もいる。

「あ・・・来た」

ゼロナは『沢田綱吉』を見つけて声を出した。

『沢田綱吉』は誰とも一緒におらず、一人でいる。

・・・それも、負のオーラ全開で。

「君、沢田綱吉だね？」

ゼロナは『沢田綱吉』に近づいて、声をかける。

「え！？あ、はい・・・そうですけど・・・」

「ああ、私の名はゼロナ。『沢田綱吉』って名前の人物を探して日本中飛び回っててね」

「に、日本中　　！！！！？」

「あ、ちょっとウルサイ」

『沢田綱吉』が大声を出したのと、ゼロナが美人なせいでかなりの注目を浴びていた。

「あ、ゴメンナサイ・・・」

「別に謝ることじゃないけどね。改めて聞くよ？君は虫一匹殺せない沢田綱吉で合ってる？」

「虫一匹殺せないって……。あーはい。合ってますよ……」

後半、声が低くなってたのは勘違いではないだろう。

「なら良かった。これで日本を回らなくて済む」

「あの……。なんでオレを探してたんですか？」

「ん？……ちょっと……。ね」

「？」

「ま、細かいことは来月にでも話すよ」

「来月？」

「君、次は中学一年でしょ？並盛中学校に通う」

「あ・・・はい」

「私も君と同年だからね」

「え・・・同年・・・？」

「うん、そう」

沢田綱吉が一瞬固まった。

「？どうかした？」

「・・・ウソですね・・・？オレよりかなり背高いじゃないですか」

「背なんておおよその年齢を把握するためではないさ」

「それはそうですけど・・・」

「ま、ともかく・・・」

ゼロナはにっこり笑って言った。

「これからよろしくね、沢田綱吉」

参幕 初登校

4月。

ゼロナは並盛中学校の制服を着て、並盛町を歩いていた。

今日は入学式。

ゼロナは少し楽しそうな表情で歩いている。

決して入学式が楽しみなわけではない。

沢田綱吉と同じクラスになれるかどうかを楽しみなのだ。

「もし一緒になれたら、観察しやすいしね」

そう、ゼロナの目的は観察だ。

「ん、着いた」

並盛中学の門には、『入学式』の文字。

「それにしても人が多いな……。そんなに固まってるって、まとめ大勢殺されるよ？」

ポツリ、と呟く。

「お・・・発見」

ゼロナはクラス発表の近くにいる人物に近寄る。

「やあ、沢田綱吉」

「うわぁー!!」

いきなり後ろから声をかけられたのが、そんなに驚くことなのか・・・。

ゼロナは心の中で言いながら話を続けた。

「久しぶりだね」

「えっと・・・。前に卒業式で会った・・・。」

「ゼロナ、だよ」

「あ、そつだ。ゼロナさん」

「沢田綱吉は何組？」

「それが……。まだ見つけられなくて……」

「……探し始めて何秒経った？」

「秒っていうか……3分」

「……バカ？」

「う……」

「……否定しないってことは、自覚アリ、か……。かなりバカなんだね」

「ゼロナさんは何組ですか？」

「待つて、まだ見てないから……。ん、A組だよ。私も、沢田綱吉も」

「早！！！！」

「君が遅いだけじゃないの？早く教室行くよ」

「ちょ、ちょっと待ってください！！！」

ゼロナはスタスタ、と教室に向かった。

「あの、ゼロナさんってどこの国出身？」

「お、日本人じゃないって分かるのか」

「だって目の色赤だし、名前も変わってるし・・・」

「あー、それでか。私はイタリア人だよ、日本語は10歳の時に勉強したから話せる」

正確には、10歳で沢田綱吉の情報を得た時だ。

「じゅ、10歳で他国語の勉強!？」

「まあね。でもすぐ覚えたけど」

「・・・頭良いんですね・・・」

「まあ、部類的にはそうじゃない？」

「・・・。あ、そういえば日本の前はどこにいたんですか？」

「んー、最後はイタリア・・・だったかな？」

「最後？」

「ああ、私はフリーの殺し屋^{ヒッターマン}だからね」

にっこり笑って言う。

それに対し、沢田綱吉は顔をひきつらせている。

「・・・殺し屋・・・？」

「うん。それがどうかした？」

「・・・今、何歳ですか？」

「私は12だよ」

「・・・何歳から？」

「殺し屋始めたの？それは・・・3歳かな」

「3歳!？」

「まあ、仕方ない状況だったからね。2歳の時から、ずっと1人で生きてきたわけだし」

「2歳の時から、ずっと1人・・・?どうして・・・」

「・・・母と兄に、捨てられたんだよ」

「な!!!」

「ちなみに私が生まれる前に父は死んだ。母も今、死んでいる」

「そ、そんな・・・」

「私の今の目的は・・・」

兄に、復讐することだよ」

感情の無い表情で言う。

沢田綱吉は、ゼロナのその表情に恐怖を感じ、顔を青ざめる。

「まさか・・・日本に来たのって・・・」

「本当は今すぐ復讐したいんだけど・・・。あいにく、兄の情報をあまり得られずね。だから兄にはまず、絶望を楽しんでもらうんだ。そのために沢田綱吉、君が必要なんだ」

「オ、オレ!？」

「うん。この様子だとまだ自分自身のことを知らないようだね。わからかるまで待つか・・・」

「（何言っただ？ゼロナさん・・・。）そういえば、いつから日本にいますか？」

「ん？2年前からかな」

「そ、そんなに前から！？」

「君を探すのが思ったより大変でね、沢田綱吉。何せ『名前』と『虫も殺せない』という情報しか無かったから・・・」

「二つ目の情報、意味あります！？」

「そんなのあるに決まってるじゃん」

「え・・・？」

「沢田綱吉、って名前の人間はよくありそうだからね。弱い、というのが決定打になる」

「・・・それってオレをバカにしています？」

「してない、と言えば嘘になるね」

「そこ誤魔化さなくていいですから!!!!」

「やっぱり君はウルサイな!。ほら、教室着いたよ?」

ガラガラ、と扉を開ける。

すると、一気に注目を浴びた。

「おい・・・誰だ?あの美人・・・」

「キャ　!見て、あのキレイな人!」

「モデルさんかな!?」

皆、ゼロナを見て叫んでいる。

「……。沢田綱吉、私しばらく他の場所にいるから、君も行くよ」

「な！？オレを巻き込まないでくださいよ！」

「私1人ですることなんて、武器の手入れくらいでヒマだからね。早く」

返事も聞かず、早足で教室を出る。

「ま、待ってください！！」

ゼロナの後を、必死に追いかけていた。

肆幕 屋上にて

それから二人が向かったのは、屋上。

これはゼロナが選んだ・・・というか、勝手にここに入った。

「あの・・・勝手に入ってよかったんですか・・・？」

「？何で？」

「だって・・・。学校の屋上に・・・」

「私達はこれから、この学校に通うんだよ？なら別に問題無いでしょ」

「・・・まあ、そうですね・・・」

「あ、敬語じゃなくていいんだけど・・・。同い年なんだし」

「う、うん……。じゃあそうするよ」

「呼び方も、呼び捨てでもいいんだよ？」

「いや……。なんかゼロナさんは、さん付けがしっくり来るっていうか……」

「ま、何だっiteいいんだけどね」

ゼロナはカバンの中に手を伸ばし、武器を取り出した。

「……それ……」

「ん？私の武器だよ？」

「……いや、それは分かるけど……。警察に見つかったら捕まるよ？」

「サツなんて、もう何人も消してるけど？」

「（絶対にこの人を敵に回しちゃダメだ……。）そういえば、いっ入学式って始まるんだろ・・・」

「うーんと、5分後だね」

「な！それってヤバイじゃん！！」

「そう？」

「そうだよ！行こう！」

沢田綱吉は立ち上がり、扉の方へ急ぐ。

だが・・・。

「あ、んじゃまたね」

「え・・・？」

「私、武器の手入れを途中で止めたくないの。だから1人でどうぞ」

「どうぞ、って言われても・・・。と、とにかくオレは行くから！
後でね、ゼロナさん」

「んー、じゃね」

ドタドタと、沢田綱吉は出て行った。

ゼロナは武器の手入れを止め、考える。

「あれが、沢田綱吉・・・。次期ボンゴレボス候補の中で最弱をボスにして、ザン兄に屈辱感^{にい}を味わってもらおうと思ったんだけど・・・

。弱すぎたかな・・・？ま、沢田綱吉に賭けてみる・・・か」

そう言つて、再び武器の手入れをした。

手入れが終わり、入学式が行われてる体育館に向かおうとした時。

ギイイ・・・。

扉が開いた。

屋上に入ってきたのは、学ランを着た男子。

ゼロナがいることには、気づいていない。

それもそうだろう。

今ゼロナがいるのは、扉の上・・・ちょっとした場所だからだ。

「あの、貴方は誰ですか？」

「!？」

男子はイキナリ声をかけられたことに驚いてか、トンファーを構えてゼロナを睨む。

「君・・・誰だい？」

「それは今、私が貴方にした質問なんですけど・・・。ま、いいで

すよ。私はゼロナ。今日並盛中学校に入った、一年生ですよ」

「ゼロナ……。1-Aに入る女子生徒だね」

「どうしてそんなことを知ってるのかは知りませんが……。合ってますよ。貴方は？」

「君に名乗る必要は無いよ」

「必要は無い……？」

「君はここで……。咬み殺す」

チャッ、と武器を構える。

「すみませんが、お断りします」

「君に拒否権は無い」

「私は依頼以外で戦う時は、私個人的にその者を倒して利益がある時と、復讐対象と戦う時だけなので」

「復讐対象・・・？君は誰かに復讐でもするのかい？」

「ええ。私の兄に」

「・・・君は面白そうだ・・・。特別に許してあげるよ」

武器を下ろす男子。

「何に怒ってたのかは知りませんが・・・。名前、教えていただけます？」

「・・・嫌だ」

「・・・じゃあ、何年何組ですか？恐らく先輩だとは思いますが」

「僕は自分の好きな学年さ」

「・・・じゃあもう、いいです・・・。貴方みたいな方なら、教師が知っていると思いますので」

「そう。もう入学式は終わったみたいだから、教室に向かった方がいいかもね」

「親切にどうも」

にっこり笑って、屋上を出る。

「・・・久しぶりに咬み殺しがいのありそうな奴が来た・・・。これから楽しくなりそうだね」

その男子は妖しく笑い、屋上を後にした。

伍幕 雲雀恭弥との約束

教室に行くと、既に教師・生徒全員が揃っていた。

ガラッ。

それに構わず、何の悪びれもなく教室に入るゼロナ。

「待ちなさい！今更来て何も言わないつもりか」

「私は入学式が始まる前に学校に来てました。その後屋上に行き、入学式に出ようと思ったたら学ランを着た男子生徒に止められたんです」

「！！？学ラン・・・？その男子生徒は、黒髪でしたか・・・？」

「？そうですけど。ああ、腕章をしてましたね。『風紀』と書かれた」

ズザザッ、と教師がゼロナから離れるように軽くのけぞる。

「そのお方は・・・ひ・ひば・・・」

「？ああ、名前知ってるんですか？是非とも教えてください」

「風紀委員長、雲雀恭弥君だ！！！」

「・・・なぜそんなに怯えているのかは知りませんが・・・雲雀恭弥、ですか。教えてください、ありがとうございます」

もう用は無い、とでも言うように教室を出ようとする。

「ま、待ちなさい！！！」

「？何ですか」

「どこ行こうとしてるんですか！」

「家ですが？」

「まだ帰宅時間では無い！席に座りなさい！」

チラッと教室を見渡す。

一つだけ空いている席があった。

沢田綱吉の近くの席だ。

「・・・じゃあ、雲雀恭弥に挨拶してから戻ります」

「あ・・・はい」

雲雀恭弥の名を出すと、教師が止めにかからない。

不思議な教師の法則を見つけ、少し中学校生活が楽しみになったぜ
ロナだった。

コンコンコンッ。

テンが良くドアをノックする。

「誰だい？」

「ゼロナです」

「・・・入っていいよ」

「失礼します」

そう言うと同時にドアを開ける。

「何の用？」

「改めて挨拶を、と思いまして。雲雀恭弥・・・貴方に」

「ワオ。僕の名前、わかったんだ」

「随分と教師に恐れられているようでしたので、簡単にわかりましたよ。学ランと腕章だけで」

「そう」

「ええ。何をしたかは聞かないでおきますけど」

「そつだ、君・・・」

「？」

「強いかい？」

「強いか、ですか……。殺しなら得意ですよ。殺し屋ですので」

「なら話が早い。早速戦おうよ」

どこからか、トンファーを取り出して構える雲雀恭弥。

「遠慮しておきます。私は先ほども言っただけですよ？」

「・・・依頼時、自分にとって利益がある時、復讐時以外は戦わない・・・のかい？」

「はい。今貴方と戦っても利益はありませんので」

「・・・じゃあ、こうしよう」

雲雀恭弥は再び妖しく笑い、一時的にトンファーを下ろす。

「僕からの依頼。僕と戦うこと。報酬は・・・そうだね。風紀委員に仮にさせてあげるよ。そうすれば必然的に腕章を君は貰える」

「腕章？その『風紀』と書かれた腕章ですか？」

「そうだよ。この腕章があれば、教師は何でも言うことを聞くことになるだろうからね。報酬として十分だと思うよ」

「・・・」

ソファアに許可なく座り、考えるゼロナ。

「いいですよ。ただし、『殺し』ではなく『戦い』ならですけどね」

「並中で死人を出すと風紀が乱れるから殺しはしないよ。それじゃあ、始めようか」

再びトンファアを構える。

「では、戦いならルールをつけましょう」

「・・・いらないよ、そんなの」

「ルールが無いのなら、私は依頼を受けません」

「・・・仕方ないね。早く決めてよ」

「私が決めていいんですね。なら制限時間は5分。時間内にどちらかが戦闘不能になったら強制終了です。武器は・・・貴方はトンファのようなので、銃は禁止で」

「・・・君の武器は？」

「？ありますけど？」

「さっき手入れしてた銃以外にだよ？」

「もちろんです。・・・確かに私だけ相手の武器を知っているのもフエアじゃないので、見せておきましょうか・・・」

袖口から、2本の棒が鎖で繋がれたものを取り出す。

「これが今回使用する武器、ヌンチャクです。もちろん、仕込みヌンチャクですがね・・・」

「ふうん。面白そうだ。それじゃあ、始めようか」

チャッ、とトンファーを構える。

「あともう一つルールあります」

「・・・何？」

「戦いをするのは、今度の休日で」

「・・・」

「貴方の性格からして納得しないと思いますが・・・。納得してくれないようなら私は依頼を受けませんし、戦いもしません。さあ、どうしますか？」

「・・・。。仕方無いね。いいよ。じゃあ土曜に学校に来てね」

「場所はこの応接室でいいですね」

「うん。楽しみにしてるよ」

トンファ―をしまい、書類整理をし始める雲雀恭弥。

「ああ、そういえば私、貴方のことを『雲雀恭弥』と呼んでますが、構いませんよね？」

「好きにすれば？」

「それなら、そのようにさせてもらいます。それでは」

ゼロナは応接室を出て行った。

約束の土曜日は、4日後……。

陸幕 雲雀恭弥との戦い

雲雀恭弥と戦いを約束した、土曜。

ゼロナは昼の12時ちょうどに応接室に来た。

時間は指定していなかったのに、雲雀恭弥はいた。

恐らく仕事をしていたんだろう。

彼は椅子に座り、書類に目を通していた。

「今忙しいですか？」

「まあ、忙しいと言えば忙しいけど、君との戦いを優先するよ」

ペンを机に置き、雲雀恭弥は立った。

「フィールドは？」

「僕はどこでもいいよ。並中が破損しなければね」

「となると、並中では無理ですね……。どこか良い場所知りませんか？私この町に来て日が浅いので、よく知らないんです」

「だったら地図見て自分で決めて」

棚から一冊の本を取り、ゼロナに渡す。

並盛町の地図だ。

「・・・あ、ここはどうですか？並盛山。山なら暴れて何か破損しても、自然の力で直ると思いますし」

「いいよ。じゃあ早く行こうか」

そして二人で並盛山に向かった。

今の二人の服装は、雲雀恭弥が学ラン、ゼロナは私服だ。

戦うので、動きやすい格好で来ている。

白いタンクトップの上に赤いボーダーの首周りが広い長袖。ズボンは普通のジーンズ。

並盛は平和な町なので、殺し屋とバレなそうな服を選んだのだ。

「さて、始めましょうか」

「うん。もう待ちくたびれたよ……。僕の期待、裏切らないでね・
・」

ブワッ。

雲雀恭弥から膨大は殺気が放たれる。

「こんな殺気では弱いですよ。さて、このコインが地面に着いたらスタートです」

ピンッ。

コインは宙を舞う。

カッン。

ガッ！！

コインが落下したと同時に、ヌンチャクとトンファーがぶつかる。

「制限時間があるのを忘れないでくださいね？」

「ワオ。随分余裕だね」

「もちろんです。だてに2歳から殺し屋してませんよ」

「そのくらいはやれなきゃ、興ざめだよ」

目に見えぬ速さで攻撃が繰り返される。

互いに防御はしていない。

だが攻撃がぶつかり合い、互いにダメージは無い。

「ふうん・・・この程度かい？」

「まさか。ああ、私はまだ一割の力も出していないですよ。」

「なら安心したよ」

ゴオオッ！！

今までの倍以上の速さで戦いが続く。

「くっ」

雲雀恭弥の右腕に、ゼロナのヌンチャクがヒットする。

「ヌンチャクって、扱いづらいんですね……。なのになぜ、使っていると思いますか？」

息など全く切らずに話しかける。

「さあ・・・ね。知らないよ」

「それは、敵に対しても対処しづらいからです」

「確かにそうかもね。否定はしないよ」

「でしょう？・・・残り、1分ですね」

すると、ゼロナの攻撃スピードが10倍ほどになる。

「!?!」

ドガッ!!

重い一撃が雲雀恭弥の腹に直撃した。

「さて・・・フィニッシュですよ」

「・・・まだだよ」

「ムリをしないでください。今の一撃で骨を一本折りました。そして・・・時間切れです」

「・・・・・・・・」

「納得はしないでしょうね・・・ですが終わりにには変わりありません。・・・楽しかったお礼に、報酬はいりません。そして、私はもう貴方と戦う気はありませんので」

「・・・僕はまた戦うつもりだよ」

「なら私以外の人と戦ってください。私は二度と同じ人物から依頼を受けません」

「・・・わかったよ」

フラフラしながら雲雀恭弥は立ち上がる。

「一本とはいえ、骨を折った状態で立ち上がりますか・・・。折った張本人が言える言葉とは思えませんが、お大事に」

「・・・またね」

二人は並盛山を降り、帰る場所へ帰った。

お知らせ

突然ですが、私はしばらくアクセス、そもそもパソコンを使用することができなくなります。

理由は、病気で指をあまり使用しない方がいい、と言われたからです。

小説の方は、難波壱さんに頼ませていただいたので、難波壱さんが新しく投稿してくださります。

あ、私がそのようにお願いしたんです。

難波壱さん、改めて申し訳ありません。

同時連載は大変だと思いますし、私が毎日更新じゃなかったので、週1更新とかで全然構いませんので！！

私が作者として表示されている『憤怒の雪』は、後日、私の妹に削除してもらうので、お気に入り登録してくださっている方は、難波壱さんが作者として表示されているものに再登録してください。

話は初めから難波壱さんに助けてもらいながらでしたし、私が考えた話の続きはすでに難波壱さんに伝えてあります。

あ、でも皆さまの小説はこれからも楽しみにさせていただきます！！

私がパソコンを触れないだけで、妹や母に頼めば読めますので

これからも楽しみにしてます

私が小説を削除する理由は、けじめを付けたかったからです。

そのために難波壱さんにご迷惑がかかってしまつて申し訳ありません。

それなのに受け入れてくれて、ありがとうございます。

活動報告も自分では打てなくても、家族に頼んで打てるかもです

：それなのに小説は？、と思つた方。ここが私の『けじめ』です。

本当にご迷惑をかけて申し訳ありません。

尚、この文章は活動報告でも書いてありますので。

それでは、また。

おしらせ。その式です

はい、お久しぶりです。

無事に手術は終わっていたんですが、しばらくパソコンのことを忘れていまして、今妹に打ってもらってます・・・。

返信、その他、今できない状況ですので返信が無くても『あれ?』と思わないでください・・・。

小説にことは前回のおしらせで伝えたいと思いますが、難波壱さんに『書き始めるのは新年からにしてください』というワガママを言うてしまいましたので、新年から書いていただきます。

・・・本当、色々とすみません・・・。

あ、あと設定とかもだいたいぶ変えてもらう予定です、『ここ、前のと違うじゃん』と思わず、『これが正しいんだ』と思ってください。

話を考えるときに、よく難波壱さんに助けていただいていたので、違和感があったとしても少ないと思います。

恐らく、これが本当の本当に最後となります。

今までご愛読(って言うんですか?)、ありがとうございました!!

そして難波壱さん、よろしく願います!!

それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2163y/>

家庭教師ヒットマンREBORN! 憤怒の雪、来る！

2011年12月1日16時56分発行